

吉野川市山川町川田・八幡神社例祭における 特殊神饌

民俗班 (徳島民俗学会)

高橋 晋一*

要旨：祭礼の中で神前に供えられる神饌の種類と形態は、明治8年に「神社祭式」が定められて以降、全国的にはほぼ画一化されることになったが、神社によっては「特殊神饌」と呼ばれる、その神社に古来から伝わる独特の神饌を現在も祭礼の中で供えているところがある。現在に残る特殊神饌は、古い祭祀のあり方や神観念を知る大きな手がかりとなる。本稿では、吉野川市山川町川田の八幡神社例祭に見られる特殊神饌（七十五膳、甘酒、御花）について紹介するとともに、その意義について論じた。七十五膳、甘酒、御花のいずれの特殊神饌も特色があり古風を伝えるもので、貴重な習俗とすることができる。

キーワード：祭礼，特殊神饌，七十五膳，甘酒，御花

1. はじめに

各地の神社祭礼の中で神前に供えられる神饌（神前の供え物）の種類と形態は、明治8年に「神社祭式」が定められて以降、おおむね画一化されることになったが、神社によっては「特殊神饌」と呼ばれる、その神社に古来から伝わる独特の神饌を現在も祭礼の中で供えているところがある。現在に残る特殊神饌は、古い祭祀のあり方や神観念を知る大きな手がかりとなる。

徳島県内においても、祭礼の中で特殊神饌を供えるところが見られるが、鳴門市撫養町黒崎・宇佐八幡神社の「お御供」や、吉野川市川島町川島・川島神社の「七十五膳」、海部郡牟岐町牟岐浦・八幡神社祭礼の「曲がりの神供」など、一部を除きこれまでほとんど調査・記録されることがなかった。

本稿では、現地調査に基づき、吉野川市山川町川田の八幡神社例祭に見られる特殊神饌の実態を紹介し、その特色を検討することを通して、今後の特殊

神事・特殊神饌に関する比較研究のための資料を提供したい。

2. 八幡神社祭礼と特殊神饌

1) 八幡神社について

八幡神社（写真1）は、吉野川市山川町川田字八幡191番地に鎮座する。旧郷社。主祭神は誉田別命・足仲彦命・息長足姫命。創建年代は不詳で



写真1 八幡神社

* 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

あるが、古くから忌部氏の崇敬が厚かった社で、伝承によれば嵯峨天皇（大同4年（809）～弘仁14年（823）在位）が当社を祈願所とし、文治5年（1189）には源頼朝の命により再興されたという。建久8年（1197）、嘉元3年（1305）などの棟札が残り、歴史の古さがうかがえる¹⁾。10月22日の例祭は、各屋台組の若者らに担がれた大屋台が急な石段を勇壮に上り下りすることで知られる。

2) 八幡神社の特殊神饌とその形態

八幡神社の例祭では、通常の神社祭式に則って神前に献ぜられる神饌とは別に、特殊神饌として「七十五膳」の神饌、一夜造りの甘酒、「御花」が造られ、神前に供えられる。

神前に七十五膳の神饌を供える特殊神事を「七十五膳神事」と呼び、全国で40例あまりが確認されているが、その形態には地域性がある²⁾。七十五膳神事の本質は、数多くの神饌（土地で穫れた産物）を神前に供えることによって、神霊に対する深い信仰の念を表すことにある³⁾。齋藤ミチ子は、各地の七十五膳神事に共通して言えるのは、神饌の種々の豊富さ、多様さ、量の多さであり、七十五膳は「豊富な品数を盛り沢山にした供膳」と同義と捉えるのが妥当であろうと述べている⁴⁾。七十五膳神事の観念は中世から近世にかけて定着したとされる⁵⁾。



写真2 七十五膳の神饌（一膳分）

八幡神社の「七十五膳」は、白木の三方の上に、イリコ・ご飯・餅・昆布・栗の五種類の神饌を並べたものである（写真2）。正面（神前）から見て右手前にイリコ、左手前にご飯、右手奥に餅、左手奥に昆布、中央に栗を置く（図1）。いずれも下に榊の葉を皿代わりに敷いている。また手前に箸一膳を添える。これが「一膳」分の神饌であり、これを75

膳準備するのが本来の形であるが、神饌を配備するスペースに限りがあるため、現実には20膳ほどを神前に供える形になっている。これらは、「七十五神」に供えるものとも言われている⁶⁾。

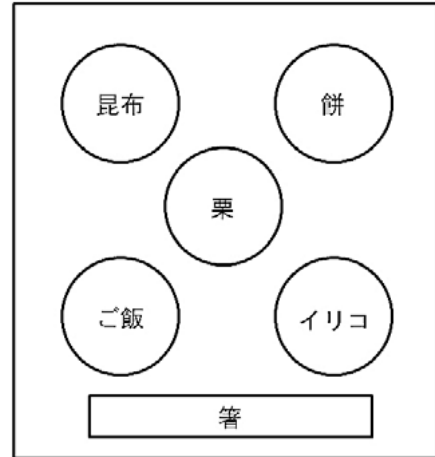


図1 「七十五膳」の神饌の配置



写真3 甘酒



写真4 御花

このほか、甘酒（写真3）と、「御花」と呼ばれる特殊神饌（写真4）が神前に供えられる。甘酒と御花は、八幡神社では七十五膳の神饌とセットとしてとらえられているという。確かに、例大祭の神事の中で、これらは七十五膳の神饌と同様、通常の神饌とは別の存在として扱われている。

甘酒は高さ30cmほどの甕に入っており、甕の口はラップで覆われている。甘酒は神饌の中でも重要なものと見なされているという。

「御花」はズキ⁷⁾(芋茎。里芋の葉柄)を長さ30cmほどに切ってきっちり束ねたものをお菓子の缶に(運ぶときにばらばらにならないように)詰め、そこに稲穂、ススキ、枝豆、竹串に刺した柿・ミカン・ナスを挿したものである。御花は2台造られる。

3) 祭りの過程と特殊神饌の奉獻

これらの特殊神饌は、毎年10月22日に行われる八幡神社の例大祭の神事の中で神前に供えられる(甘酒と御花は御旅所祭の神事でも奉獻される)。

神饌(七十五膳、甘酒、御花)の製作には神職が当たる。栗やズキなど、神饌の原材料となるものは祭りの前に氏子が持参して来るという。

祭り当日は11時から拝殿内で例大祭の神事が執り行われる。神職、助勤神職、巫女、総代一同が幣殿に参進、着座する。神事は修祓^{しゆぼつ}、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、浦安の舞、玉串奉奠^{みたまのふゆ}、恩頼(神の加護・恩恵)の授与(宮司が金幣を捧げ参列者の前で揺らしながら振りかざす)、宮司一拝の順。

通常の神饌(御神酒、米、鏡餅、塩、水、野菜、果物、乾物、魚など)は朱塗りの三方、七十五膳の神饌・甘酒・御花は白木の三方に載せて供える。神事を始めるにあたり、通常の神饌は幣殿左手の棚、



写真5 通常の神饌



写真6 並べられた七十五膳の神饌

七十五膳の神饌はその手前(拝殿左手)の案(机)の上に並べられる(写真5, 写真6)。

献饌の際には神職・助勤神職・総代あわせて20名ほどが幣殿から本殿にかけて一列に並び、手渡しで神饌を載せた三方を本殿へと運んでいく(写真7)。まず通常の神饌を供え、その後に特殊神饌を供える。七十五膳の神饌は、七十五神に対して同数並べるのが本来の形であるというが、スペースの関係で、実際に供えるのは三方20台ほどである。



写真7 献饌(例大祭の神事)

このように、八幡神社では七十五膳の神事が通常の例大祭の神事に組み込まれる形で行われている。通常の神饌と七十五膳の神饌の区別は明確に意識されているが、川島神社(吉野川市川島町)や八幡神社(吉野川市美郷平)のように、七十五膳神事が例大祭の神事と独立した神事として行われてはいない。

撤饌は、午後の神輿渡御の直前に行われる。15時、神職、助勤神職、巫女、総代一同が幣殿に参進、着座。修祓、祝詞奏上、撤饌の順に神事が進行する。

撤饌の際は、献饌のときと逆の流れで七十五膳の神饌・甘酒・御花、そして通常の神饌を手渡しで本殿から運び出し、元の場所に並べる。

神事が終わると、神職が本殿から御霊代を神輿に奉遷し、神輿が神社を出て参道先の鳥居をくぐったところにある御旅所^{おたびしょ}まで向かい、御旅所祭の神事を行った後、神社に戻る。3台の屋台が楽を奏しながら神輿^{くふ}に供奉する。

このとき、通常の神饌と、特殊神饌のうち御花2台と甘酒を御旅所^{おたびしょ}まで唐櫃^{からびつ}に入れて持って行く。七十五膳の神饌は拜殿に置いたままで、御旅所まで持っていくことはない。

15時30分、神輿が御旅所に到着すると、神輿を御旅所の神輿台（常設）の上に据え置き、神輿の前に据えた案に神饌を並べる（写真8）。神饌案は前後二段からなっており、手前の段は右手より果物（ミカン、バナナ）、乾物（お麩、とろろ昆布など）、野菜（大根、白菜）、甘酒の順、後段は右手より御花、鏡餅、酒・米、魚、御花の順に神饌が並べられる。

続いて御旅所祭の神事。修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、恩頼の授与、撤饌、宮司一拝の順。献饌、撤饌の際には、宮司をはじめ祭員が三方に載せた神饌を順次手渡しで送る。



写真8 御旅所での献饌

15時45分、御旅所祭の神事終了。引き続き御旅所^{かみよ おたからおどり}前で神代御宝踊、浦安の舞の奉納。

16時、神輿は本社へと戻り、神職が神輿から御霊代を本殿に遷し、祭りが終了する。七十五膳の神饌は総代らが分けて持ち帰る。

3. 検討

以上、八幡神社例祭の中で神前に供えられる特殊

神饌の形態と、祭礼の中での扱われ方について紹介してきた。最後に、八幡神社の七十五膳、甘酒、御花を献ずる習俗について、他地域の事例とも比較しつつ、位置づけを行っておきたい。

1) 七十五膳の神饌

八幡神社の七十五膳の神饌は、先述したようにイリコ・ご飯・餅・昆布・栗の五種類である。これらは海山里の幸を象徴したものであり、とくに米がご飯・餅という二態で奉じられていることは、この神事において（土地で穫れた）新穀の奉納が重視されていることを意味している。

筆者の知る限りでは、徳島県内で現在七十五膳神事が行われているのは、名西郡石井町高川原の天満神社、吉野川市美郷平の八幡神社、吉野川市川島町川島の川島神社、吉野川市山川町川田の八幡神社、名西郡神山町上分川又の黒松八幡神社の5ヵ所のみであり、いずれも貴重な事例と言える。なお現在は廃絶しているが、かつては名西郡神山町上分金泉^{かつら}の新田八幡神社、徳島市勝占町の勝占神社、三好市山城町大月の四所神社でも行われていた。神社所蔵の文書から、板野郡板野町下庄栖養^{すや}の八幡神社でもかつて行われていた可能性がある。

一言で「七十五膳神事」と言っても、各神社における七十五膳神事の形態、神饌の種類や数はさまざまである。たとえば、川島神社では、75台の三方にそれぞれ違った種類の神饌を載せて神前に供える⁸⁾。黒松八幡神社では、新米で作った米飯・ミカン・池の月（麩焼き煎餅）各1を75台（実際にはスペースの関係で35台ほど）の三方に載せて神前に供える（筆者調査による）。天満神社では、75台の折敷の1つ1つに、ご飯・汁（麩）・おひら（かんぴょうを小さく切ったもの）・魚（イリコ2匹）・中ちよく（昆布）の5品を載せ、拜殿内に臨時に設けたひな壇状の棚に供える⁹⁾。八幡神社（吉野川市美郷平）では、栗・橘・米の団子（ゼニゴック）各1個に竹串を挿し三角錐をなし、その頂点にズキを挿し稲藁で巻いてさらに御幣を挿す。三角錐の下に円錐状に整えたご飯を置き、空いている四方に小さな団子を載せる¹⁰⁾（写真9）。これを75膳作る。山川町川田の八幡神社の七十五膳は、これら県内他地域の事例ともまた形態が異なっている。

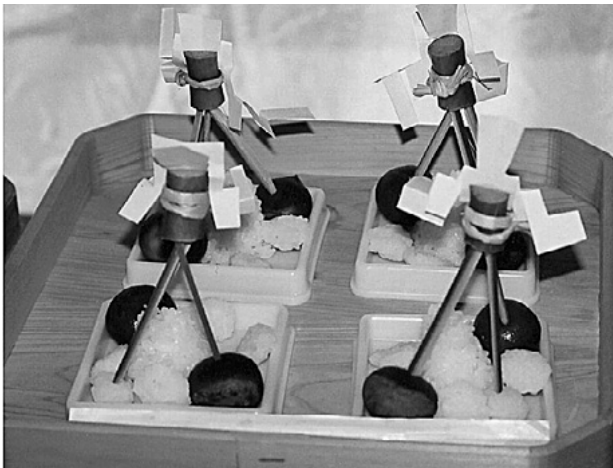


写真9 八幡神社（吉野川市美郷平）の七十五膳の神饌

齋藤ミチ子は「七十五膳」について「七十五という数を聖数とする観念が前提にある」ことを指摘した上で、「七十五膳という呼称がまず念頭にあって、その名目に合わせるべく、様々な工夫がはかられているのが実態といえる」と論じている¹¹⁾。県内の七十五膳神事（七十五膳の神饌）の形態が多様であるのは、一定の祭式がある特定の神社から伝播して広がったのではなく、「七十五膳神事」という名称だけが伝わり、各神社において独自の解釈で祭式が考案、伝承されてきたことによるものと思われる。

2) 甘酒

神前に甘酒を奉納する習俗は、古風を残したものと考えられる。古く（近世以前）は多くの地域で氏子が醸した酒（多くは甘酒）を神前に奉納していたようである¹²⁾。昔の祭りの神酒は一夜酒すなわち甘酒が用いられ、祭りの前に仕込むのが酒の本来の性格であった¹³⁾。

七十五膳神事に甘酒が伴う事例は少なくない。川島神社の七十五膳神事では、おごく（米飯）・米に代表される新穀と、新穀から作られた酒（清酒、甘酒）が重要視されている。天満神社の七十五膳神事では、甘酒が鏡餅・魚・御神酒と並び最上段に祀られており、神饌の中でも特に重視されていることがわかる。黒松八幡神社の七十五膳神事では、昭和40年代まで「一夜造りの酒」（甘酒）が供えられていた。温かいご飯に麴を入れて一晩置いて造ったもので、杉の木でできた飯櫃くらいの大きさの「福水桶」に注いで祀った。この甘酒は非常に神聖なものと考えられていた（いずれも筆者調査による）。

このように、おごく（米飯）・米を代表とする新穀と、新穀から作られた酒（清酒、甘酒）が特に重視されている点から、七十五膳神事の新穀感謝の祭りとしての性格を見て取れる。

甘酒はおごくや米と同様に新穀の象徴であり、これらの象徴を通して、新穀をもたらしてくれた神靈に対する感謝の念、稲魂の霊力に対する信仰の念が表されるのである¹⁴⁾。甘酒を祀る祭りは、日本人の神祀りのあり方の古層を示す貴重な事例と言えよう。

3) 御花

「御花」という呼称は、神前への献花を模した形状に由来すると考えられる。八幡神社の「御花」は、ズキに稲穂、枝豆、ススキ、柿、ミカン、ナスを挿したもので、その素材や形態から、作物の実りを象徴したものと推察される。

八幡神社の「御花」に類する形態の神饌は、県下では他に見ることができず、非常に特色あるものと言える。似た形の神饌は、むしろ近畿地方の古社の伝統祭礼（とくに宮座祭祀）の神饌の中に見いだされる。

奈良県天理市海知町・倭^{やまとおんち}恩智神社例祭の特殊神饌に「七色の御供」と呼ばれるものがある¹⁵⁾。七本の竹串に里の幸の梨、ミカン、栗、桃、柿、ミョウガ、ナツメを刺し、ズイキ芋の台に扇状に刺したものである。奈良県宇陀市室生^{むろう}・室生龍穴神社の例祭では、「すこ」と呼ばれる特殊神饌が献ぜられる。「すこ」は、栗、柿、ミカン、里芋、餅などを串に挿しズイキに飾



写真10 奈良市大安寺町・八幡神社例祭の「献花幣」

り付けたものである。そのほか、京都府城陽市富野荒見田・荒見神社おいで祭りの「百味御供」¹⁶⁾、奈良市大安寺町・八幡神社例祭の「献花幣」¹⁷⁾ (写真10) などにおいても類似の形態の神饌が見られる。

こうした近畿地方の古社に残る特殊神饌と八幡神社の「御花」との関係については今後の研究課題としたいが、地域間の伝播も想定される。いずれにせよ、八幡神社の「御花」は古風を残した県下では特異な神饌と言え、貴重である。

4. おわりに

以上、吉野川市山川町川田の八幡神社例祭に見られる特殊神饌について紹介するとともに、その意義について論じてきた。前章で述べたように、七十五膳の神饌・甘酒・御花は新穀・収穫感謝の心意が象徴された特色ある神饌であり、祭りの古風を伝える貴重な習俗である。

これまで県下の祭礼調査においては、神輿渡御や山車の巡行、民俗芸能など「表から見える」部分を中心に取り上げられ、神事については比較的看過されてきたように思われる。しかし、密やかに行われる神事の中に祭りの古風を示す要素が残っていることも少なくない。今後はこうした特殊神事・特殊神饌にも注目して県下の祭礼の調査研究を進める必要があるように思われる。

謝辞：調査に当たっては、八幡神社宮司・熊代美仁氏にたいへんお世話になりました。ここに記して謝意を表します。

注

- 1) 徳島県神社庁 (1981) : 313-314頁。
- 2) 奥村 (1995) : 6頁。
- 3) 高橋 (2003) : 33頁。

- 4) 齋藤 (1999) : 1頁。
- 5) 奥村 (1996) : 26頁。
- 6) 改訂山川町史編集委員会 (1987) : 795頁。ただし、具体的に「七十五神」がどのような神を指すかは不明である。
- 7) 一般には「ズイキ」と呼ぶが、徳島方言では「ズキ」と呼ぶ。
- 8) 奥村 (1995) 16-17頁。
- 9) 石井町史編集会 (1991) : 1017頁。
- 10) 高橋 (2004) : 166頁。
- 11) 齋藤 (1999) : 1頁。
- 12) 齋藤 (1996) : 2頁。
- 13) 西角井 (1958) : 23頁。
- 14) 高橋 (2006) : 16頁。
- 15) 岩井 (1981) : 123-128頁。
- 16) 岩井 (1981) : 129-131頁。
- 17) 岩井 (1981) : 156-163頁。

文献

- 石井町史編集会編 (1991) 『石井町史 下巻』名西郡石井町
 岩井宏實編 (1981) 『神饌-神と人との饗宴』同朋舎出版
 奥村貴子 (1995) 「七十五膳据神事の研究 (上)」『岡山民俗』203, 1-21頁
 奥村貴子 (1996) 「七十五膳据神事の研究 (下)」『岡山民俗』204, 25-36頁
 上分上山村誌編集委員会編 (1978) 『上分上山村誌』上分上山村
 齋藤ミチ子 (1996) 「神饌の地域間比較-神酒造りとその展開」『國學院大學日本文化研究所紀要』78, 1-23頁
 齋藤ミチ子 (1999) 「多膳形態の諸相-七十五膳について」『國學院大學日本文化研究所報』35-6, 1-3頁
 高橋晋一 (2003) 「徳島県の七十五膳神事」『徳大広報』110, 33頁
 高橋晋一 (2004) 「平八幡神社祭礼について」『阿波学会紀要』50, 165-168頁
 高橋晋一 (2006) 「甘酒の霊力-徳島県の祭礼の事例から」『土佐地域文化』10, 11-17頁
 徳島県神社庁教化委員会編 (1981) 『徳島県神社誌』徳島県神社庁
 西角井正慶編 (1958) 『年中行事辞典』東京堂出版
 山川町史編集委員会編 (1987) 『改訂山川町史』改訂山川町史刊行会

Traditional offerings in the festival of Hachiman Shrine, Kawata, Yamakawa Cho in Yoshinogawa City.

TAKAHASHI Shinichi,

Proceedings of Awagakkai, No. 58 (2012), pp. 161-166.